

第14回「日本語大賞」

テーマ 私が^{だいじ}大事にしている言葉

中学生の部 文部科学大臣賞 受賞作品

「言葉を受け取って」

埼玉県

さいたま市立大谷場中学校

一年 本山 みい

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

私は小学校四年生くらいまで、介護が必要な認知症の祖母と暮らしていた。正直、もう小学校に進学しているのに「みい、幼稚園は楽しかったかい？」と何回も聞かれたり、だんだん介護が大変になり精神的にも肉体的にも追い詰められていく母を見たりしては、祖母のことが嫌いになっていった。兄と祖母の愚痴を言い合うことや、「おばあちゃん、もうちよつと頑張つてよ」と祖母に直接キツイ言葉を投げかけたりすることもあった。その時の私たちは限界だったのだと思う。

その日はいつもより涼しくて、過ごしやすかった。家に帰ってきて、ベッドで横たわっている祖母にただいまを言う。いつも通りの日課。そしてご飯を祖母のいる下の階に持っていくとき、祖母が重い口を開いた。「ご飯もってきてくれてありがとうね、辛い思い、いっぱいさせてごめんね」と。当たり前前に感じるかもしれない。でもいつもあまり喋らない祖母が、「こんなにはつきりと感情を口にしたのは認知症が進行した後では久しぶりだったので、私はとても驚き、祖母のまっすぐに見据えられた眼を振り払うように、「大丈夫だよ、気にしてないよ」と言うことしかできなかった。次の日、夜飯を持って行った兄と母が、祖母の脈が止まっていることに気づいた。急いで主治医に電話する母を見て、胸の鼓動がまるで頭に直接流れているように緊張していたことを覚えている。その後祖母の死亡が確認されたが、祖母の死亡確定をきいた瞬間、「もう解放されるんだ」と考えた自分に驚き、同時に腹が立った。でもやっぱり悲しくて皆が主治医の話に集中している内に、バレないよう下を向いて泣いた。

あの時、祖母はどんな気持ちで感謝と謝罪の言葉を口にしたのか、お葬式で知らない人が何か長い話をしている時にずっと考えていた。祖母は家族が皆、自分のせいで辛そうにしてるのを一番大きく感じていたのだと思う。だからこそ最後に、私たちに今までありがとう、今までごめんという思いを伝えてくれたのだと気づいた。そして、あの時自分も祖母に少しでもいいから素直になって、こちらこそありがとうと伝えていれば良かったと、黒いレースカートを汗がにじむほど握り、後悔した。

人の命は有限だ。誰でも知っていることだがそれをすぐそばの人に置き換えリアルに想像して考えられている人は少数だと思っている。後悔しても、消えてしまった後には何も伝えられない。後悔の無いように、毎日がどれほど尊いものであるかを意識して生活することが大事なのだ。祖母の言葉を通じて考えることができた。

もう祖母が亡くなってから三年ほどの時間が経過した。あの時の祖母の悲しそうな表情と言葉を思い出すいつも目頭が熱くなる。「大丈夫だよ気にしてないよ」。そう言った私から少しは成長できただろうか、祖母にそう問うてみたい。祖母の「ありがとう」と「ごめんね」に詰まった想いを全て受け取れきているとは思わない。これからきつとこの祖母の言葉を思い出すたび祖母は、こんな風に思っていたのかもしれない、あんな意志があったのではないかと思うことがあると思う。いつか祖母の言葉の真意を受け取り、心の底から想う感謝を伝えたい、そう思った。